

(6) 「〵四郎衛門」

181×25×4 032

(1)は、いわゆる転読札で、富貴を祈願している。(2)は、戌の年に貢納した米を記述している。(3)の上部には、穴が穿たれており、何かを綴じたものと思われる。(4)は、詳しくは不明であるが、あるいは将棋の「角行」と関係のあるものかもしれない。(5)は、上の二文字がはっきりしないが、「於」「ゆ」の可能性が高い。そうすれば、「お湯呑み」となり、茶碗を示した付札のようなものと推定できる。(6)は、人形状の木札に「四郎衛門」という名前が書かれている。

これ以外にも、墨痕のある木片が多数出土しているが、判読はできなかった。時期は、同じく桃山時代から江戸時代のものである。

なお、釈読に当たっては、奈良国立文化財研究所の綾村宏氏、館野和己氏、森公章氏、渡辺晃宏氏のご教示を受けた。また、現地の発掘調査成果や出土状況などについては、京都府埋蔵文化財調査研究センターの森島康雄氏より教示を得た。

(土橋 誠)

京都・遠所遺跡出土木簡(補遺)

本誌一四号で報告した同遺跡の出土遺物について、整理をすめたところ、新たに木簡が確認されたので、紹介する。

「〵余戸郷^[物部カ]□□真成田租粃五斗〵」

297×20×6 031

この木簡は、製鉄遺跡とされる遠所遺跡の砂鉄埋納土坑から出土した。この木簡に書かれた余戸郷は『倭名抄』では、調査地の所在する郡には存在しないこと、類例の少ない田租の荷札木簡であること、また、製鉄関係の遺跡と見られる発掘地で、この木簡が出土したことの意味など、今後検討を要する問題を含んだ木簡である。

(土橋 誠)